

滝川太郎二題

―別府大学所蔵作品から―

山 本 晴 樹

【要 旨】

本学には滝川太郎の二つの絵が所蔵されている。《御茶ノ水風景》(1928年)と《銀座より15分 晴海の朝》(1960年)である。前者は滝川が渡仏する直前の絵であり、後者は滝川が脳溢血のため右手が使えなくなり、左手で描いたおそらく最初の絵である。二つの絵とも滝川の人生の画期で描かれたものと思われる。このような絵がどのような経緯で本学に所蔵されるようになったのか、滝川と佐藤義詮氏との交友を手がかりに考察した。

【キーワード】

文化学院、一水会、石井柏亭、滝川太郎、佐藤義詮

以前、別府大学創立100周年記念号の『別府大学紀要』に本学の初代学長・理事長であった佐藤義詮氏(1906-1987)の文化学院在学時代の関連で、滝川太郎(1903-1970)の絵《御茶ノ水風景》(1928年)をとりあげ、小文を書いたことがあった(1)。その後、作家の黒川創氏が新潮社の季刊誌『考える人』に連載した「きれいな風貌 西村伊作伝」のなかで、滝川太郎の本学所蔵のこの絵に言及された。実は、本学には滝川太郎の絵がもう一つ所蔵されている。《銀座より十五分 晴海の朝》(1960年)がそれである。前者は滝川太郎が、渡仏する直前の絵であり、後者は彼が脳溢血のため右手が使えなくなり、左手で描くようになってから最初に描いたと思われる絵である。二つの絵はそれぞれ、滝川太郎の人生の画期で描かれたものともいえる。このような絵がどのような経緯で本学にもたらされたのか、ここであらためて本学における所蔵作品のなかにおける滝川太郎の二つの絵の由来について述べてみたい。

1. 《御茶ノ水風景》(1928年) 油彩 M60 (130,3×80,3cm)

この絵は、《御茶ノ水風景》と題されているように、神田川にかかる橋の風景を描いている(2)。現在のJR中央線御茶ノ水駅に掛かる「聖橋」から川上の「御茶ノ水橋」をながめた風景であろう。橋の左端の建物はおそらく駅舎と思われる。というのもこの頃の御茶ノ水駅のプラットホームは橋の手前側ではなく向こう側にあったからである。黒川氏はこの絵に関して、滝川太郎の心象風景を次のように述べられている(3)。



図1 滝川太郎《御茶ノ水風景》1928年



図2 《御茶ノ水風景》(部分)
(左下に Takigawa 1928 のサイン)

「この絵における通学生たちの姿の不在が、私には、当時の滝川太郎の居場所を示すようにも見えてくる。つまり、彼は、職場の文化学院の界限でありながら、その学生たちとは行きあいそうにない場所をえらんで、イーゼルを立て、これを描いているのである。

こうした作品を描いた翌年、かれは上海へ。さらにその次の年には、シベリア経由でパリへと向かう。ここから先にどんな未来が待っているかを、まだ、若い彼自身も知らない。ただ言えるのは、この橋上に立つとき、彼は、絵を描くことを、確かに愛していたらしいということである。」

1928年という製作年に注目すれば、この年にはすでに「聖橋」(1927年竣工)は完成していた。山田守設計のモダニズム建築の傑作としてあまりにも有名なこの橋は、しかし滝川太郎の絵には描かれていない。彼がまさにイーゼルを立てた場所が「聖橋」の橋上であったからである。ここで素朴な疑問がわく。大抵の画家であれば、当時衆人の注目する「聖橋」をモチーフにすると思われるからである。だが滝川はそうはしなかった。このような構図からも、彼の複雑な心象風景がうかがわれる。

滝川太郎《御茶ノ水風景》の裏側(図5)を見る限り、木枠上辺に Takigawa Taro のサイン(図6)が判読できる以外、何らかの展覧会に出品した貼り紙等は見られない。このことからすると



図3 現在の御茶ノ水駅と聖橋
(2008年6月2日御茶ノ水橋上から撮影)



図4 現在の御茶ノ水橋
(2008年6月2日聖橋上から撮影)

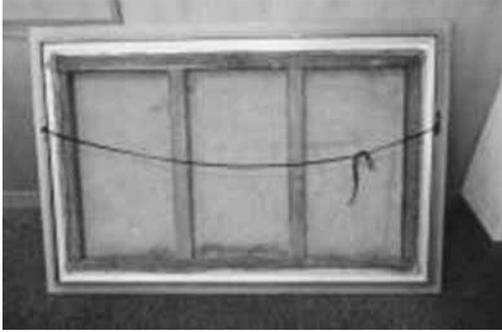


図5 《御茶ノ水風景》裏側

図6 《御茶ノ水風景》裏側（部分）
（木枠上辺にTakigawa Taroのサイン）

恐らく、佐藤義詮氏は滝川の渡航費用を援助するためにこの絵を購入したのではなかろうか。というのも、倉品平氏によれば、滝川の渡仏を支援するために、昭和5年（1930年）松本市の友人たちが作品頒布会を計画しているからである。この頒布会の趣意書は滝川の生涯の師であり、当時与謝野晶子とともに文化学院の学監であった石井柏亭が書いた。それによれば頒布価格は当時の価格で次のようになっている（4）。

〈A スケッチ板25円、B 六号35円、C 八号45円、D 十号 55円〉

《御茶ノ水風景》の規格はM60であるから、これには当てはまらない。佐藤氏は個人的に援助したのであろう。その金額は氏にとって決して少額ではなかったはずである。こうして500円が集まった。滝川への支援はこれにとどまらなかった、翌年滝川が渡仏すると、その年の2月「滝川太郎滞仏後援作品頒布会」が、またもや松本市の友人たちによって結成され、滞仏中の作品が頒布されている（5）。友達冥利に尽きるというものであろうが、滝川は友人たちがそうしないではおれない何かをもっていたのかもしれない。草創期の文化学院で図書係兼美術科助手をしていた滝川と同じ時代を過ごした第一期生（大学部）の佐藤義詮氏もそのような友人の一人だったのでなかろうか。

2. 《銀座から十五分 晴海の朝》（1960年） 油彩F25（80,3×65,2cm）

この絵では煙突から煙を吐く工場の入り口に向かう人々のうしろ姿と、それを見送る二人の女性、あるいは左側は女性で右側は男女の区別の付かない人物が描かれている。私の印象では、中央の禿げ頭の男は恐らく滝川自身であろう。彼が向かっている先は晴海の工場らしき光景ではあるが、滝川が脳溢血で死線をさまよったことを考えると、なにやら焼き場（火葬場）のようにも見える。中央の人物（滝川）を見送る二人は家族で、一方はスイス国籍の妻と他方は彼女

図7 滝川太郎《銀座より十五分 晴海の朝》
（右下に「T. Taro 左」のサイン）

との間にもうけた子息かもしれない。

裏側にはこの絵の成立事情が詳しく記されている(6)。

この絵の裏側には左右に縦書きで図9と図10の記述がある。

右側(図10)は下記のとおりである。

昭和三十五年 於上野
第二十二回一水会選

此ノ年正月十六日発病
三ヶ月「月島」の病院
病後逗子に於快癒、図即ち完成

この記述からすれば、滝川は昭和35年(1960年)1月16日病に倒れ、3ヶ月入院した後、逗子で療養し、快癒した後この絵を第22回一水会展に出品している。一水会は滝川の恩師である石井柏亭などが中心となって昭和11年(1936年)に結成された美術団体で、滝川は第一回から出品している(7)。



図8 《銀座より十五分 晴海の朝》裏側

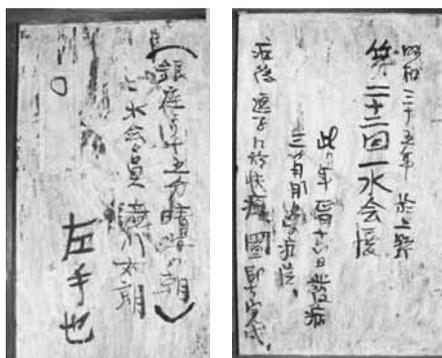


図9 裏側左

図10 裏側右

田中穰氏によれば、第22回展は1960年の9月22日から10月10日にかけて開催されている(8頁)。とすると、絵裏側の記述を信ずるならば、この絵の作成期間は少なくとも逗子で療養している同年5月から9月の間ということになる。

裏側左(図9)は次のように記されている。

(銀座より十五分 晴海の朝)
一水会会員 滝川太朗
左手也

裏側左には、《銀座より十五分 晴海の朝》と書かれてあり、おそらくこの絵のタイトルと思われる。そして「滝川太朗」のサインの横は「左手也」と読める。すなわち滝川は病(脳溢血)のため、右手では描けなくなったので、左手で描いた作品であることを記しているわけである。左上には恐らく第22回一水会展への出品のための貼り紙と思われるものが残っているが、現状では判読不能である。この後、滝川は自分の絵のサインに「太郎」の名に続いて「左」の文字をいれるが、作成時期からすれば、この絵はおそらく左手で描いた最初の作品ではなかろうか。

これに対して滝川太郎の年譜として最も詳細な滝川留未子『画家 滝川太郎』の巻末「年表」によれば、昭和35年および昭和36年の項は以下のようにになっている。

昭和35年（1960年）57歳

双台社展「七月の海」
一水会展「銀座より15分の晴海の夕べ」
滝川太郎個展、東京美術画廊で開催。
脳溢血で倒れる。

昭和36年（1961年）58歳

逗子に転居。左手で描き始める。
一水会展「黄波の後」「八月の花」
双台社展「雨後の庭」「豪雨の後」

また滝川留未子氏は同著のなかで、次のように書かれている（9）。

「昭和35年（1960年）2月、滝川太郎が脳梗塞で倒れたのだ。命は助かったが右半身は麻痺して動けないし、話すこともままならない。

そこで鯉吉（滝川太郎の子息：筆者註）の友人が、リハビリテーションに適した環境だと、逗子に住まいを探してくれて、引っ越しをした。逗子に住み着いた太郎は愚痴一つこぼさず、自分自身があみだしたリハビリに励み、左手で絵が描けるようになるほど回復して行った。」

これらのことからすれば、絵のタイトルは《銀座より15分の晴海の夕べ》となっており、また逗子に転地療養し、左手で作成し始めるのは翌年（昭和36年）のことである。タイトルや療養時期そして左手での作成の開始時期に絵裏側左右の記述と齟齬があるが、ここでは滝川の絵裏側の記述に従うことにしたい。

1960年製作の《銀座から十五分 晴海の朝》が購入された経緯はまだ明らかではないが、佐藤氏は以前、滝川の渡仏を援助したように、当時病に倒れ生活にあまり余裕のなかった滝川をこの絵の購入によって支援したのではないだろうか。

1928年製作の《御茶ノ水風景》を購入した後、佐藤義詮氏は滝川太郎の渡仏によって、その交友は一旦途絶える。しかし、佐藤氏は文化学院卒業（1928年）後、少なくとも1932年までは東京にとどまっているし、滝川の渡仏は1930年末なので、そのころまでは恐らく二人は交流していた。そして佐藤氏は戦後も東京に毎年のように出かけたので、1940年に帰国した滝川との交流は続いていたものと思われる（10）。

これまで、本学に所蔵されている滝川太郎の二つの絵の由来について述べてきたが、これらの絵は滝川にとっては人生の節目に位置するものであり、佐藤氏にとっては文化学院（大学部）入学以来の滝川との友情の証といえるものであった。その意味では佐藤義詮氏と滝川太郎との交友は終生変わることはなかったのであろう。

註

- （1） 拙稿「一枚の絵－別府大学と文化学院をつなぐもの－」『別府大学紀要』第50号（別府大学創立100周年記念特集号）。滝川太郎の本格的な評伝はまだ出版されていないが、近親者

による伝記として、滝川留未子『画家 滝川太郎』(遊人工房 2005年)がある。また滝川太郎に関する新聞連載記事として、倉品平「松本平人物誌27 滝川太郎」『市民タイムス』1991年10月～11月(全30回)がある。

- (2) 前述の拙稿ではタイトルを《お茶の水風景》と表記したが、本来は漢字カタカナ表記にすべきであるので、ここでは《御茶ノ水風景》とする。
- (3) 黒川 創「きれいな風貌 西村伊作伝(第6回)」『考える人』新潮社2009年秋号(No.30)221頁。この連載は2011年新潮社から単行本『きれいな風貌 西村伊作伝』として出版されたが、ここでは連載時の文章を引用することにしたい。
- (4) 倉科 平「滝川太郎(12)」『市民タイムス』1991年10月29日付
- (5) 倉品 平「滝川太郎(13、14、15)」『市民タイムス』1991年10月30日、31日、11月1日付
- (6) 図9の写真からもわかるように、裏側の文字は白く塗られたキャンバスの上に書かれている。おそらく文字を際立たせるためか、あるいは裏側キャンバスには別の絵が描いてあり、それを塗りつぶしたのではないかと思われる。
- (7) 一水会の創立に関しては、田中 穰『一水会五十年史』(中央公論美術出版 1988年)が詳しい。
- (8) 田中穰、前掲書巻末「一水会展覧会目録」299頁
- (9) 滝川留未子、前掲書81頁
- (10) 佐藤義詮氏のご息女は東京での学生時代(昭和34、35年頃)、上京した父親の佐藤氏と会ったとき、その場に滝川太郎が居合わせたことがあったと話されている。とすると時期的には滝川がまだ脳溢血で倒れる以前(昭和35年以前)であろう。このことからすれば、佐藤氏は戦後も滝川とは交流があり、彼の闘病の様子も知っていたのではなかろうか。

(附記)

滝川太郎および彼の絵に関する資料収集にあたっては、本学文学部の安松みゆき教授(西洋美術史)および藤森千博講師(英語学)のほか、大竹永明氏(元松本市美術館学芸員)そして親族の滝川留未子氏に大変お世話になった。ここに深く感謝の意を表したい。